

～ セピア色の風景 ～

「田舎の小売店」

青田 茂雄

仙台建設業協会専務理事

実家から直線距離概ね200m以内に、雑貨店が2軒、魚屋が2軒、豆腐屋が1軒あった。雑貨屋2軒のうち東の1軒が酒も扱う店で、自然発生的にモッキリ屋となっていて、定時に近所のおじさんが家族の食卓の脇で飲んでいたので、通しガラス戸越しによく見かけた。その雑貨店の前は、バスの停留所だった。西の雑貨店は、小学校の校門前で文房具が揃っていた。その店にいつしかテレビが入った。もちろん、普通の家にない頃だ。いかにその店に買いたい物もしなくて入り込むのが毎日の楽しみであり、悩みだった。わが家では買い食いするような小銭を持たせる家庭ではなかった。小遣いを持たせてもらったのは、中学生になってからだ。

2軒の魚屋には、偏らないようにバランスよく買い物に行かされたように思う。何か買うと同時に、魚のアラがあれば買ってくる（ほとんどもらったと思う）ようによく言われた。当時の魚屋の冷蔵庫は、電気ではなく氷を入れたもので木製で内側が金属張り、金属の取っ手などが付いていた。

西の魚屋さんのおじさんは、配達（ほとんど刺身だと思ふ）が常にオートバイで、道の角という角、家の入口という入口で、クラクションを鳴らすので有名だった。片や東の魚屋さんは、揚げ物なども売り、そこのおかみさんは仕出しの技があり、当時各自宅でやっていた冠婚葬祭によく出張していた。

真ん中にあつた豆腐屋さんは、あまり店らしい構えがなかったもので卸しが主だったのだろう。釜の燃料が薪の時代で、わが家には薪があつたのでしばしば物々交換していた。豆腐の買い物は、わが家はザル持参だった。より安価なオカラ（当時はキシヤズと言っていた。『切らず』からきたような）が多かったように記憶している。

時代は高度成長期。町にスーパーなどができ始め、兼業農家の勤めの人が町で買物を済ますことが多くなっていた。ある日親父は言った、「少々高くて、この辺で買わないとダメなんだ、残すようにしないとダメなんだ。ほら、店なくなつてみる、いざというときに困るのは、コッツ（こつち）なんだ」と。

今、少子高齢社会の買い物難民の時代、ブリキの広告が貼り付いた店構えのセピア色の風景とともに、親父の言葉が響く。

●あおた・しげお 1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める